

二〇二二年度入学選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から○まで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「面白いとは何か？」について差異(違い)という要素を挙げて説明してきましたが、もう一つ重要なポイントは、

「差異というのは、相対的なものである」という点です。

例えば、サッカー日本代表で言えば、一九九七年のシヨホールバルのキャンキ^①でW杯初出場を果たした時は、日本中で喜びが爆発しました。

A、今では六大会連続でW杯出場を果たしているため、差異を感じるとすれば、日本代表がW杯出場を逃した時の方がはるかに大きいでしょう。日本中がシヨックを受け、悲嘆に暮れると思います。

このように、差異というのは、その情報を受け取る人々の感覚や時代などの状況によって変化する相対的なものなのです。とすると、人の心を動かすコンテンツや製品を生み出すには、

「いかに差異を設定するか」
がカギになります。

一つの例を挙げて説明しましょう。ステイブ・ジョブズが率いる米国・アップル社が初代iPodを世に送り出した時、この製品は世界で最初に発売されたケイタイ型デジタル音楽プレーヤー^②ではありませんでした。遅れて市場に登場した後発機に過ぎなかったそうです。さらに、機能面でもライバル製品より明らかに劣っていたのです。

しかし、他社製品に比べて、iPodには明らかに差異(違い)のある要素が二つありました。それは、シンプルさとデザイン性です。他の製品は複雑なボタンを配していて、ごてごてしたものばかりでした。ユーザーの心を動かし、大ヒットしたのは、他の製品と違う洗練されたiPodの方でした。

B、「作り手がいかに差異を設定するか」によって、人の心を動かせるか、「面白い」と思ってもらえるかどうか

変わってくるのです。

そう捉ええると、ビジネスにおけるマーケティングに対する考え方も変わります。世の中で流行^{はや}っているものを後追²いたところで、そこには大きな差異はありません。そこそこのヒットしか見込めないことは明らかなのです。

こうした考え方は、テレビ番組にも当てはまります。ニュース、情報バラエティ、ドキュメンタリー、ドラマなどジャンルを問わず、大きな反響を呼び、評判となる番組には必ず何らかの差異の要素が組み込まれています。

一方、定番³やベタ⁴といわれる番組は驚きや意外性といった差異が少なく、期待通りに進行するものですが、視聴者にとっては刺激が少ないため、長い目で見ると次第に飽きられていく傾向があります。

作り手が能動的に差異を設定することは、番組の演出や構成に関わる重要な要素です。

C、ドキュメンタリー番組である人物を取り上げる際にも、私は必ずその人物が持つ隠れた差異(意外性)に注目するようにしています。取材を通してそれを見出し、巧みに提示することで、「この人にはこんな一面もあったのか!」と、差異によって視聴者の心を揺さぶり、その上でその人物に共感をおぼえてもらえるように構成するのです。

ここでもう一つの重要な要素として、共感⁵が登場しましたが、最初から共感に訴えるよりも、まずは差異を伴³って心を動かし、視聴者のモノの見方を広げた上で共感へと導くプロセスが重要だと考えています。というのも、誰にとっても心地よい共感⁶だけでは不十分だと感じているからです。

その人はマイクを握るなり、開口一番、こう言いました。

「私は『共感』というのは、相当怪しいものだと思います」

そう発言したのは、話題のドキュメンタリー『ヤクザと憲法』『人生フルーツ』『さよならテレビ』といった作品のプロデューサーとして知られる、東海テレビの阿武野勝彦^{あぶの}さんです。

阿武野さんらが手がける東海テレビのドキュメンタリーは今、テレビ業界の内外で大きな注目を集めています。毎年、番組

コンクールで受賞するのはもちろん、番組を再編集して劇場公開も行い、単館上映で記録的な観客動員を達成するなど異例のヒットも飛ばしています。地方局が制作するドキュメンタリーが一つのブランドとして確立し、これほど注目を集めている例は極めて珍しいでしょう。

先ほどの発言は、二〇一七年二月に開催された番組制作者フォーラム(主催：放送文化基金)でのものでした。それまで会場では、ある番組を見た後に観客のテレビ制作者から、「すごく共感できました」といった、ごくありふれた当たり障りのない感想が述べられていました。そうした空気が、阿武野さんのひと言で一変したのです。

(中略)

共感とは、コンテンツを語る際に必ずと言ってよいほど耳にするキーワードです。「共感消費」「共感こそが人の心を動かす！」などと謳うものをよく見かけます。しかし、そうした見方に反して、私は共感に一種の危うさを感じていました。

共感とは、具体的に言えば、

「その気持ち、私もよく分かる」

という、自分の考えや境遇、感覚が他者と一致するときに抱く一体感や安心感のこと。自分と相手との間に共通点を見出し、共鳴する。だから、とても心地よいものでもあります。別な言い方をすれば、共感とは、

「〃元々の自分〃を前提とし、相手の中に〃自分の一部〃を見出すこと」

とも言えるでしょう。私は、まさにその点に危うさを感じていたので。なぜなら、共感する当人には、特に変化が起きていないからです。共感に従って自分の考えや境遇、感覚と同じものだけを追い求めれば、その人の考えは徐々に凝り固まり、先鋭化していきます。共感には、「物事が自分の思っていた通り(期待通り／予想通り)だった時に抱く感覚」という側面もあるのです。

こうした共感を狙うことで、手っ取り早く一定の支持を得ることは可能でしょう。実際、そうした作品やビジネスがあるのも事実です。また、まったく共感されない作品にも問題があると思います。しかし、人々が本当に「面白い」と感じる作品

は、^③アンイな共感を狙って作られたものでしょうか。

当然のことながら、世の中は想像をはるかに超えて複雑で豊かです。自分の感覚とかけ離れた人物や文化、価値観、常識などが無数に存在しています。共感を頼りに突き進むと、望み通りのモノや人と出会い、溜飲りゅういんを下げることはできませんが、自分を取り巻く世界は広がっていきません。冒頭で、

「面白いとは、^④差異と^⑤共感の両輪である」

と述べましたが、私はあらゆるコンテンツを語る上で、この相反する^④ガイネンがどちらか一方だけでなく、共存することでより深い共感が得られると捉えています。

そもそも、私たち人間の営みそのものが、差異と共感の両輪の上に成り立っています。人は差異という刺激を受け、自分に変化を加えながら成長し、価値観や世界観を広げてより多くのものに共感できるようになっていくのです。

多くの人の心を揺さぶる作品も、何らかの差異によって視聴者に新たな気づきを与え、モノの見方を広げ、それまで異質と捉えていたものを^⑤キョウウし、より深い共感へと導くプロセスを^{たど}辿るものではないでしょうか。

(佐々木健二『面白い』のつくりかた』による)

問一 線部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 線部「^①相対的なもの」とあるが、「相対的」とは

どのようなことを示しているか。具体的に説明している部分を本文中より三十字以内で探し、最初の五文字を抜き出して答えよ。

問三 空欄 に入れるのに、最も適

切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア しかし イ 例えば ウ つまり

問四 — 線部 2「後追い」とあるが、同様の考え方で作られたものとはどのような番組か。本文中の語句を用いて簡潔に答えよ。

問五 — 線部 3「差異を伴って心を動かし」とあるが、心を動かすために必要な差異とは何か。本文中の語句を用いて答えよ。

問六 — 線部 4「共感に一種の危うさを感じていました」とあるが、なぜか。説明せよ。

問七 — 線部「誰にとつても心地よい共感だけでは不十分だと感じている」とあるが、なぜか。十分にするために必要と考えているものが何かを明らかにして、説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

姉は高校三年生の七子、弟は小学六年生の七生^{ななお}である。
家庭の事情からこの異母姉弟^{きょうだい}の二人きりで暮らすことになった。

「すべて計算の上ってことね」

洗面所から出ていこうとした七生に言った。

「計算？」

七生は振り返って首を傾^{かし}げた。

「そうよ。わざとらしいのよ。なにもかも。しゃべり方、笑い方……、あんたはいつも周りの人間に気に入られることばかり考えてる。どうすればかわいがってもらえるのか知ってるのよ」

「いけない？」

七生がいつになく挑戦的に言うので、私はかちんときて思わず声が荒立った。

「いけないって、あんたはまだ十一でしょう。なのにちっとも子どもらしくないわ。もっと子どもって、人の顔色見ずに自分の思うように行動するものよ。あんたは人の顔色しか見てない。いつもいい子ぶってるのよ。わざとらしくって吐き気がするわ」

1 七生は眩^{まぶ}しそうに目をしかめながら、私の顔をじっと見ていた。そして小さな声でつぶやいた。

「子どもだからだよ」

「え？」

「僕はまだ十一歳だから。……大人に気に入られないと生きていけないもん。一人じゃ何もできないもん。食べるものも住む

場所も、一人じゃどうにもできない」

七生は静かに言った。

「確かにそうだけど……」

七生の言うとおりのだ。母さんに引き取ってもらわなければ、七生はどうなっていたかわからない。面倒をみてくれる大人がいなくては、子どもは生活できないのだ。考えたこともなかったけれど、それはとても深刻な事実だ。

「でも、子どもももっともってと純粋なものなの。そう、もったきれいな」

私はいい加減なことを言っつて、七生に反論した。七生は少し困った顔をした。そして、ゆっくりと私の顔を見上げて言った。

「今は僕、まだばかだけど、これから賢くなつていろんなことわかるようになって、いいこと悪いこともつとはつきりわかるようになって、いいことだけを取り入れられるようになって、自分の汚い部分を取り除く方法もわかるようになって、したらきれいになる。それじゃだめなの？」

「だめなのつて……」

² 私はずいぶん喉が詰まっつて言い返せなかつた。

(中略)

あの一件があつて以来、七生と私はやつぱりギクシヤクシヤしていた。もともと上手うまくいつてなかつたけど、今まで何かとしゃべりかけてきた七生におとなしくされると、居心地が悪かつた。時間が経たてば知らぬ間に何とかなるものだと思つていたが、三日経つても、七日経つても、どうにもならなかつた。時間は私たちを元どおりにするために何の力も貸さず過ぎていくだけだつた。本当の姉弟じゃない私たちは、ずれた関係を自然に修復する方法を知らなかつた。

夕飯のチンジャオロースうが辛かつたせいとか、喉が渴いいてなかなか寝つかなかつた。レトルトの調味料を使つて炒いためるだけなのに、私が作るといい具合に出来上うがらない。料理の才能は皆無だ。

水を飲みみに一階に降りていくと、台所の電気がついていて、七生も水を飲みみにきたのだらう。私の前ではおいしいと言つて

いたが、やはり辛かったのだ。台所のドアを開けて入っていくと、流しの前に立っていた七生がびくっとして振り向いた。突
然夜中に私が入ってきたことによっほど驚いたのか、七生は声も出さず固まったまま私を見ていた。

「辛かったんでしょう。夕飯」

私がそう言いながら近づいていくと、七生は手に持っていたものを慌てて背中に回した。

「何？」

私は食器棚からコップを取り出しながら尋ねた。

「え……？」

七生は背中に何かを隠したまま、後退りしながら私から離れていく。

「何持ってるの？」

「なんでもない」

七生はどぎまぎしながら首を振った。相当の慌てようだ。どうやら、水を飲みに来たのではないようだ。

「なんでもないって、夜中に台所で何してるのよ」

「別に……。ななちゃんこそどうしたの？ 夜中に」

七生はそう訊いてきたが、声がうわずっていた。いつもなら、どんな状況でもさらりと対処するくせに、すっかり落ち着きをなくしてびくびくしている。

私は質問には答えずに七生を窺うようにじっと見た。もう一時を回っている。そんな時刻に、台所でこそそそといったい何をしていたというのだろう。何を必死で隠しているのだろう。

「じゃあ、僕もう寝るね」

七生は私の視線から外れようと体をかすかに動かしながらそう言って、背中に何かを隠したまま出ていこうとした。

「ちょっと待って」

私は七生の腕を掴んで出ていくのを止めようとした。

「放して」

七生が私の手を振り解こうとした時、ぼたっと鈍い音を立てて、七生の手から箱が落ちた。

「あ……」

七生はか細い声をあげた。

「何これ？」

私は箱を拾い上げた。それが何の箱なのか、すぐにわかった。同時になんとも嫌な気持ちになった。小さな花の絵が一つ描いてある白い箱。駅前のケーキ屋のものだ。何をしてるのかと思えば、七生は夜中にこそとケーキを食べようとしていたのだ。

「返して」

七生が消え入りそうな声で言った。

「どうして隠れて食べるのよ。堂々と食べればいいじゃない」

今まで何度かこうやって夜中にケーキを食べていたのだろうか。想像するとぞっとした。

「いいから返して」

「いやらしい。あんたがこんなに食い意地が張ってるとは知らなかったわ」

私の声が夜中の台所に鋭く響いた。

「返してってば」

七生は私の手から箱を奪い取ろうとした。

「そんな必死で取り返さなくても、誰もこんなケーキ食べないわよ」

私がそう言っって箱を開けようとする、七生は悲痛な声をあげた。

「やめてななちゃん、開けないで」

「何なのよいったい。開けて見るくらい、いいでしょ」

「お願いだから、開けないで」

⁴七生は目に涙を浮かべながらそう言った。そんなにケーキが大事なのだろうか。私はますます苛^{いらだ}立った。

「ねえ、ななちゃん、返して」

七生は私の手を握って箱を奪い取ろうと引っ張った。

「いやよ」

私は七生の手を振り切って、箱を開けた。

中には小さな円形のショートケーキが入っていた。いつのものだろうか。イチゴは萎^{しな}びていて、すっかり硬くなった生クリームはひび割れていた。腐ったケーキの上には、さつき落とした衝撃で割れてしまった大きなチョコレートの板が載っていた。

「これ……」

私はケーキの箱を抱えたまま七生を見た。七生は羽をちぎられて逃げる術^{すく}を失った小鳥のような顔をして、俯^{うつむ}いていた。

「どうして……」

どうして隠してたの、どうして渡してくれなかったの、どうして……。私は鼻の奥がじんわり痛くなるのを感じた。どうしてかはよくわかっていた。

腐ったケーキの上のチョコには「ななちゃん誕生日おめでとう」の文字があった。

「だって……」

何か言おうとしていたが、七生の声は噎^{しわが}れていてうまく続かなかった。

四日前、私は十八歳になった。病院で母さんに祝ってもらって、その後野沢と過ごした。七生からはおめでとうの言葉もなかったが、私の誕生日を知っているとは思っていなかったし、気にも留めていなかった。

「七生こういうの渡して喜ばせるの得意じゃない」

私がそう言って微笑むと、

「だって、あなたちゃんこういうの嫌いでしょ」

七生もほんの少しだけ笑った。

「食べよう」

「え？」

私の発言によつぽど驚いたのだろう。七生は素っ頓狂な声をあげた。

「これ。少し遅くなったけど、せっかくのバースデーケーキだし」

「だめだよ。もう腐ってるもん」

「大丈夫だって。今どきのケーキはそんな簡単に腐らないって」

私はケーキの箱を顔に近づけた。甘い香りの代わりに酸っぱい匂いがした。

「四日間も机の下に置いてたんだ。絶対腐ってるよ」

「どうして四日間もそんな所に置いておくのよ。ケーキは熟成させてもおいしくなんないよ」

私はそう言って吹き出した。

「だって、最初は渡すタイミングがわからなくて、次は捨てるタイミングが見つからなかったんだもん」

七生が言い訳がましく言った。

「そっか」

私はもつともだつて頷いた。少なくとも今の七生はいとしいと思えた。

「ねえ。本気で食べるの？」

七生が心配そうに尋ねた。

「とっても本気。絶対に食べる」

夜のせいか、おなか为空いているのか、なぜか私は無性にこのケーキが食べたかった。黄色くなった生クリームや水分がなくなったスポンジを口に入れたいと思った。崩れかけたこのケーキがすごくいとしく思えた。腐⁵っていろいろ味がどうなっ
ていようが、体に入れたいと思った。

(中略)

七生は泣くことを止めないままで私の向かいに座った。

「さあ、食べよう。おめでどうは？」

「おめでどう」

七生は台拭きでごしごと顔を拭いて、ちっとも気乗りしない声で私を祝ってくれた。

「ありがと。では、いただきます」

私はケーキを口に運んだ。スポンジの間に挟まれているイチゴが、すっぱさを通り越して苦くなっている。生クリームはかなり嫌な味がした。味覚音痴の私にも腐っているのが明らかにわかった。

「うん。確かに腐ってる。でも、すぐにジュースで飲み込めば大丈夫」

私は心配そうに見つめる七生にそうアドバイスして、もう一口ケーキを口にした。七生も私に続いてケーキを口に入れると、顔を歪^{ゆが}めた。半分泣いているせいもあって、七生の顔はとても面白くなった。

「七生、これ駅前のケーキ屋さんで買ったでしょ。あそこってパン屋が片手間でケーキ作ってるだけだから、おいしくないんだよ」

私は吹き出しながら言って、またケーキを口に入れた。なんとも言えない味が口中に広がる。おなかを壊すのは確実だ。

「こんな変な味のケーキ食べるの最初で最後だろうな。しかもバースデーケーキ。絶対忘れられない誕生日になりそう。ふふ
ふ」

夜中のせいで、ついでにケーキにもあたってしまったのかもしれない。私は少し饒舌じょうせつになっていた。七生は涙を流しながらも、ケーキを黙々と食べていた。

ケーキがあまりにまずいからだろうか。そっと捨てようとしていたのに私に見つかってしまったからだろうか。どうして七生がこんなに泣いているのかはよくわからない。七生の目からは面白いくらい真っ直ぐまっすぐに涙が落ちた。子どもってというのは、私が思っているよりずっと単純なのだ。

私たちは夜中の台所で、腐ったケーキを残さず平らげた。

(瀬尾まいこ『卵の緒』所収「7's blood」による)

【注】 *野沢 II 同級生のボーイフレンド。

問一 — 線部1「七生は眩しそうに目をしかめながら、私の顔をじっと見ていた」とあるが、これは七生のどのような気持ちを表したのか。説明せよ。

問二 — 線部2「私はなぜか喉が詰まって言い返せなかった」とあるが、なぜ七子は言い返せなかったのか。説明せよ。

問三 — 線部3「なんとも嫌な気持ちになった」とあるが、なぜ七子は「嫌な気持ちになった」のか。説明せよ。

問四 — 線部4「七生は目に涙を浮かべながらそう言った」とあるが、なぜ七生は涙を浮かべたのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 隠しておいたケーキを姉に見つかることで叱られることが怖かったから。

イ こっそりケーキを食べようとしたことを姉に馬鹿にされたくなかったから。

ウ 自分から姉に渡したかったのに姉が見つけてしまったことが悔しかったから。

エ 渡したくても渡せなかった姉へのプレゼントを知られたくなかったから。

問五 空欄 X に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 消極的な イ 絶望的な
ウ 致命的な エ 内向的な

問六 — 線部5「腐つていようが味がどうなつていようが、体に入れたいと思った」とあるが、ここから読み取れる七子の七生への思いはどのようなものか。説明せよ。

問七 — 線部6「私は少し饒舌になっていた」とあるが、七子を饒舌にさせていたのはどのような思いか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

*勢州高田門跡の狐、京都藤森へ官に登るとて、ある村の者に取りつきて、口走りて、一宿を乞ひける故、「安き事なり」とて、赤の飯・油揚あぶらあげやうのもの馳走ちそうして、「さて狐は稲荷いねいりのつかはしめ、福を祈れば福を与へると聞き及びし故、何卒福を与へ給へ」と願ひければ、右狐つき答へて言ふやう、「我々福を与へるといふ事、知らぬ人の申す事なり。すべて福を植うると云ふ事あり、是を伝授こすべし。すべて人のため世のためになる事心がけいたすべし。しかしかかる事したりといささかも心に思ひよりては福を植うるにあらず。無心に善事をなすを福を植うるといふなり。且つ我々福分を授くる事成りがたしとはいへども、善事ある人へは、或ひは盗難あ有るべきは我等来たりて枕元の物を落とし、又強き音などさせて眠りをさまし、その難を免れしめ、或ひは火災などあらん節も遠方の親族・知音*へも知らせて人を駆けつけさせて、家財等を取り退のけなどする事あり。これ則ち福を与ふるといふ物ならん」と語りしとや。

(『耳囊』による)

【注】 *勢州高田門跡 三重県津市の真宗高田派の専修寺。

*稲荷 稲荷神社。

*知音 親友。

問一 —— 線部1「安き事なり」とあるが、何が簡単なこと

問三 —— 線部3「福を植うる」とあるが、何をすること

だというのか。簡潔に答えよ。

か。本文中より十字以内で探し、抜き出して答えよ。

問二 —— 線部2「我々」とあるが、誰のことか。答えよ。

問四 — 線部 4「いささかも心に思ひよりては」とある

が、どういうことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分だけが善いことをしたと自慢する
- イ 自分はこんな善いことをしたと自負する
- ウ 自分にできることはわずかだとあきらめる
- エ 自分が善いことをしなくてはと背負い込む

問五 — 線部 5「福を与ふる」とあるが、例えばどのようなことをしてくれるのか。適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 盗人が忍びこもうとしたとき、大きな音を立てて盗人を驚かす。
- イ 盗人が忍びこもうとしたとき、家の人に知らせて捕まえさせる。
- ウ 盗人が忍びこもうとしたとき、大きな音を立てて家の人を起こす。
- エ 火災に遭ったとき、遠方の知り合いのところまで送り届ける。
- オ 火災に遭ったとき、遠方の知り合いに知らせて家財を送らせる。
- カ 火災に遭ったとき、遠方の知り合いに知らせて手伝いに来させる。

